

地域研究への誘い

—— 地中海世界を材料に ——

加 藤 博

はじめに 世界のグローバル化と「地域」

1990年代はグローバリゼーションという言葉で代表される時代であった。グローバリゼーションとは、国境を越えたヒト、カネ、モノ、文化、情報の地球規模での移動と、そのことによって引き起こされた政治・経済・社会・文化に係わる広域の問題群を総称する言葉である。

キー・ワードは「国境を越えた」である。このことから分かるように、グローバリゼーションの対抗軸は国家という政治単位である。とりわけ、政治経済学（ポリティカル・エコノミー）的な文脈ではそうである。

しかし、もうひとつのグローバリゼーションの対抗軸がある。それは「地域」である。地域社会のなかにグローバリゼーションという言葉に含意される生活スタイルの統一化、画一化への対抗軸を探そうというのである。

そこでは、地域は文化とほぼ同義である。文化は国家の枠組みでは捉えきれない。それゆえに、地域は国家をも相対化する単位である。つまり、地域という言葉は、その多くが、グローバリゼーションに対する多文化主義との関係から使われている¹⁾。以下、このように解された地域とそれを研究することの意味について少し考えてみよう。

1 歴史学と地域研究

(1) 歴史学の研究対象

さて、通常、地域研究は「現代」と結びつけられた問題関心を出発点とすると

考えられている²⁾。ところが、少なくとも私にとって、地域研究は歴史学——私としては、歴史学などという大袈裟な表現を避けて、歴史研究と呼びたいのだが——とほとんど重なっている。それは、地域という概念が深く歴史と結びついていると考えるからである。というよりは、少々挑発的な発言となるが、地域は歴史そのものであるとさえ思っている。

私がなぜこのような地域観を抱くようになったかの大きなきっかけは、ある歴史家の歴史論との出会いである。その歴史家とは、アナル学派と深い関係をもちながら研究をすすめているフランスのヨーロッパ古代史家、ポール・ヴェーヌである³⁾。その彼は、まず歴史を以下のように定義する。

歴史は本当にあった出来事の物語(レシ)である。この定義の枠内で考えると、歴史の権威を手にするには、ひとつの事実がたったひとつの条件をみたしていればよいことになる。つまり、現実が起こった、という条件をみたしていればよいのである。(『歴史をどう書くか』22ページ)

この定義自体は何の変哲もない。歴史学が決して譲れない条件を確認しただけである。私が興味を抱いたのはこの先、つまり、かくして定義された歴史を研究の対象とする歴史学を説明する、次のような彼の言葉である。

歴史だけに特有な歴史的な説明というものが存在しないからです。ほかの多くの学問と同様に、歴史は別の科学すなわち社会学に助けを求めながら、自分の素材に形式を与えます。同じことで、数多くの天文学的現象がありますが、私の誤解でなければ、天文学的な説明というものは存在しません。すなわち、天文学事象の説明は物理的なものなのです。にもかかわらず、天文学講義は物理学講義ではありません。(『差異の目録』4-5ページ)

つまり、ヴェーヌによれば、人文・社会科学における歴史学は自然科学における天文学のようなものである。なぜならば、宇宙の現象を説明するのに天文学的

な説明というものはなく、あるのは物理学的な説明であるが、だからといって、宇宙が存在し続けるかぎり、天文学という学問がなくなるわけではないからである。

同じように、人間社会の現象を説明するのに歴史学的な説明というものはなく、あるのは社会学的な説明であるが、だからといって、この地球が破滅せず、人間社会が存在し、世代交代を続けるかぎり、歴史学という学問がなくなることはない。

ここで、天文学にとっての物理学的な説明とは、物理学のみならず、数学や統計学など、自然科学を成り立たしめている理論全般を指していると考えられる。同様に、歴史学にとっての社会学的な説明とは、ヴェーヌの表現によれば、精神・政治科学、つまり社会学のみならず、経済学、政治学などの社会科学を成り立たしめている理論全般を意味している。

私は、もう20年近くも前になるが、ヴェーヌのこの文章を読んで、歴史研究とどういう学問であり、どういう学問であらねばならないか、また歴史研究と社会科学のディシプリンとの関係はどのようなものであるべきかなど、これまで延々と繰り返されてきた歴史学の方法論について深く思い悩むことをやめた。

つまり、私は歴史研究の方法論については、オポチュニストになったのである。歴史学にとって、第一義的に重要なのは資料であって、その分析方法はその資料の性格に応じて、自然・社会・人文諸科学から自由に借りてくれればよい、というわけである。

ところで、ヴェーヌの比喻による歴史学の説明はこれにとどまるものではない。彼はいくつもの面白い比喻的な比較によって歴史学という学問に思いもかけぬ角度から光をあてているが、そのひとつに歴史学と社会学との比較がある。つまり、そのようにはっきりと表現してはいないものの、歴史学が「対象のある学問」であるのに対して、社会学は「対象のない学問」だというのである。

ここで、社会学は「対象のない学問」だという時、ヴェーヌが社会学は文字通り対象がない学問だと主張しているのではないことは言うまでもない。ヴェーヌの議論はポレミックで修辞に満ちた難解なものであり、ここでも、対象がないと

は、やや揶揄的に、そして挑戦的に、具象的、具体的な研究対象がないということである。

つまり、ヴェーヌが言わんとしているのは、歴史学が現実起こった出来事を研究の対象としているのに対して、社会学は社会類型、社会システムなど、具象的、具体的な状況を捨象した、普遍的で抽象的な概念を研究の対象にするということなのである。ヴェーヌはこのことを、別のところでは、歴史の「質料」(素材)とそれを説明する概念あるいは問題関心(形式・構造)というかたちで表現している。

(2) 地域研究の研究対象

さて、以上は、時間の学問としての歴史学についての議論である。ところで、この比喩的な比較の議論を、試みに空間についての学問に適用してみたらどのようなになるであろうか。すなわち、ヴェーヌが言う歴史学にとっての具体的な研究対象、つまり出来事とは、空間の学問において何であろうか。それは、私のみるところ、「地域」である。そして、この地域を具体的な研究対象にしているのが地域研究と呼ばれてきた研究分野である。

こう言うと、必ずや、いや空間の学問とはまず何よりも地理学である、との反論が出されるであろう。しかし、私が理解するかぎり、地理学は好んで景観類型、空間システムなど、普遍的で抽象的な概念を研究の対象にしており、この意味において、先のヴェーヌの時間の学問についての議論における「対象のない学問」、つまり社会学に相当するものと考えられる。

思うに、フランスのアナール学派は歴史学と地理学、つまりは時間の学問と空間の学問の結婚をうたい文句に出発した。アナール学派の創設者たち、マルク・ブロック、リュシアン・フェーヴルの時代の地理学、たとえば、そのほとんどが景観の叙述からなるヴィグル・ドゥ・ラ・ブラーシュの地理学は歴史学と結婚できたかもしれない⁴⁾。しかし、現在の地理学は具体的景観叙述のレベルをはるかに越えて、抽象度の高い対象をもつ学問になっているように思われる。

そのなかで、アナール学派がかつて目指した幸せな結婚となりうる可能性の高

いカップルは、高い理想を諦め、パターン化した、究極の恋愛におぼれることのない、ともに「対象のある学問」である歴史学と地域研究ではないかと思われる。そして、このカップルが幸せな結婚となるためには、歴史学も地域研究もともに、「対象のない学問」である社会・人文科学、さらには自然科学で鍛えられたさまざまな理論や方法論を許容する懐のひろさをもたなくてはならない。

それでは、地域研究の具体的な研究対象である地域とはどのようなものであろうか。地域とは、固有の生態系のもとで、さまざまな内外の個人や集団の権益が交差する具体的かつ歴史的な場である。しかし、それは同時に、一方では、その住民の帰属意識（アイデンティティ）と、他方では、それを外部から認識し、識別する者の問題関心や利害関係と、結びついている。

そこから、さまざまに異なった地域概念が主張されることになる。つまり、ある者は固有な生態系を強調する存在論的な地域概念を、またある者はさまざまな内外の権益の交差を強調する権力秩序としての地域概念を、さらにある者は関係者の帰属意識を強調する認識論的な地域概念を主張する⁵⁾。

このように、地域概念はさまざまである。しかし、地域を固有の生態系との関係で定義する研究者や地域は内外の権益の交差によって客観的に定まるとする研究者であっても、生態系や権力秩序が歴史を通して不変であると考えないかぎり、地域がわれわれの認識行為と深く結びつき、ある歴史状況のなかで選び取られてきた概念であることを否定しないであろう。

ここでわれわれの認識行為とは二重の意味をもつ。第一は、地域に権益をもつ内外の関係者の当該地域に対する認識行為である。その核心にあるのは、指摘するまでもないながら、地域住民の帰属意識（アイデンティティ）である。第二は、地域を研究対象とする研究者の当該地域に対する認識行為である。それは当該地域に対する権益を背景とした、研究者の問題関心と問題設定と結びついている。

つまり、地域はわれわれの認識行為のなかで戦略的にほかの地域と区別され、切り取られるという側面をもっている。そもそも、客観的にある地域が定まるとしても、そこで生活している住民が、少なくとも日常生活において、その地域を意識しているわけではない。歴史のなかで地域が形成されることと、それを特定

の名称で呼ぶこととは、異なる次元の問題である。

(3) 地域研究の対象としての「海域」

ところで、戦略的に選び取られた性格を強くもつ地域概念として、現在、歴史学や地域研究のなかで注目されている「海域」がある。海域とは、海を介して結びついた「地域」のことである。「世界」という言葉の意味の曖昧さを生かして、「海によって形成された世界」といってもよいかもしれない。

そして、この海域概念を採用するという戦略における標的、それはわれわれがそのなかで生活し、その存在を当たり前のことと考えている国家という政治単位である。たしかに、近代ヨーロッパに生まれた国民国家はわれわれの生活をすみずみにいたるまで干渉し、われわれの生活は、日常生活から国際政治経済まで、国家の枠組みを前提として営まれている。その結果、われわれは国家を単位としたものの見方に余りにも慣れすぎた。

しかし、少し考えてみれば明らかなように、国家という政治の単位と経済、社会、文化の単位は一致しない。排他的な領有権を主張する国民国家が成立する以前の時代においては、こうした一致がなかったことは言うまでもない。そもそも、国境なるものが存在しなかったのであるから。

また現在では、国民国家の行く末についての議論が盛んである。グローバリゼーションという言葉に端的に示されるようなカネ、モノ、ヒト、文化、情報が国家という枠組みを越えて移動し、地球規模での政治・経済・社会・文化問題を引き起こしているからである。一部では、国家の終焉さえもがささやかれている。

国家（ネーション）という枠組みを前提とするかぎり、人や社会の交流は国家間（インター・ナショナルな）関係として捕捉される。そこでは、すべてが国家あるいはナショナルなものが作りだす権力の磁場のなかに置かれ、交流の諸相は国家間の力関係を最大の要素として説明される。そのなかでは、多様な社会生活や文化状況を反映し、国境を越えて展開される交流のあり方は無視あるいは軽視、さらには不法なものとみなされがちである。「難民」問題はその典型である。

しかし、現実の人々の日常的な生活や帰属意識（アイデンティティ）は多様で、

複合的なものであり、国家という枠組みのなかに閉じ込めておくことはできない。とりわけ、人や社会の交流がさかんな時代と地域にあってはそうである。冷戦体制の終焉後の20世紀末において頻発した地域紛争は、この帰属意識（アイデンティティ）の多様性と国民国家という枠組みとの間の齟齬に起因している。

かくして、われわれの社会生活のどの次元や局面を取り上げるか、またどの次元の帰属意識（アイデンティティ）を扱うかによって、つまりは問題設定をいかにするかによって、研究の分析単位も変えざるをえない。このように、地図の上ではともかく、現実の生活では、われわれの生活はいくつもの領域の重なり合いのなかで営まれている。そして、これらの歴史的に形成される領域を空間として言い換えたものが「地域」であるならば、国家は「地域」のひとつでしかない。

以上から、「海域」を地域として設定することの戦略性も、自ずと明らかであろう。つまり、海は、少なくとも軍事技術の飛躍的な発展がみられた現代まで、国家権力の及ばない空間と考えられてきた。現在でも、基本的には、海は国際法（国家間の法）が適用される「公海」であろう。

そのため、これまでの歴史において、海を国境で囲み、そこに排他的な領有権を主張する政治単位を設けるなどという発想はなかった。海はあくまでも地域と地域を結ぶ、と言うよりは、地域と地域を遮断する空間であり、海での支配権が争われたときでも、それは、海に存在する島々の領有権をめぐる争奪としてなされた。

そこで、「海によって形成された世界」をひとつの地域として設定し、そこでのカネ、モノ、ヒト、文化、情報の交流を考察するならば、その諸相はおのずと、国民国家の枠組みを前提として考察されたものとは異なるものとなろう。つまり、それらを、インター・ナショナルな関係としてではなく、多様で相互依存的な関係として描くことができるに違いない。

2 「地域」としての地中海世界

(1) 幻想としての地中海世界

地中海が現在において注目されるのも、それがこのような意味での海域として

恰好な研究テーマだからである⁶⁾。近年における日本での、アカデミズムを巻き込んだ地中海ブームを作ったのは、言うまでもなく、フランスのアナール学派の歴史学者フェルナン・ブローデルの著作『フィリップ 2 世下の地中海と地中海世界』(邦語訳『地中海』)——正確には、その日本語訳の出版——である⁷⁾。

この歴史書には多くのユニークな発想と膨大な量の情報が盛られているが、そこでの新機軸を一言で述べるとするならば、地中海研究において、地中海と地中海世界を区別し、論じたことであろう。地中海とは、そこに多くの島が存在するとはいえ、文字通りの「海」とそれが形成する自然環境あるいは生態系である。そして、地中海世界とは、この「海」によって結びつけられた周辺の諸々の社会からなる世界である。

ブローデルのこの著作のアカデミズムにおけるインパクトは、この本来は海でしかない地中海を歴史研究の対象、それも主人公としたことである。実際、ブローデルを高く評価するのは、ヨーロッパ社会やイスラム社会など、地中海世界を構成する諸々の社会を研究する者であるよりは、地中海周辺の諸々の社会を交流の相のもとで捉えようと試みる研究者である。

さらに、ブローデルによって提起された「地中海世界」観はひとつのアナロジーとして受容され、その影響力は地中海研究を越えていく。そのひとつの成果が、わが国における、近世・近代の世界経済史で果たしたアジアの役割を再評価するために、インド洋や東アジアの海に注目し、モノとヒトの多様な交流の諸相を明らかにしつつある「海のアジア」論である⁸⁾。

実際、ブローデル自身が、「地中海」という言葉を、アジアの「海域」のアナロジーとして使っている。つまり、その著作『文明の文法 世界史講義』のなかで、次のように言っているのである⁹⁾。

アジアの東の海と東南の海——日本海、黄海、東シナ海、バング海、ホロ海など——の多くは、ごく細い水の帯のような縁海であり、近接する大陸にいわば囚われの身のようになっているのである。……それゆえ、こうした海はいずれも「地中海」なのだ。つまり、大地に囲まれ、島々がちりばめられた海洋空

間であり、あらかじめ人間的な性格があたえられているのである。(I, 284 ページ)

たしかに、歴史的にみて重要な「地中海」は、インド洋や東南アジアの海のほか、いくつもあった。バルト海、カリブ海などである。しかし、こうした「地中海」のなかでも、本物の地中海はきわだって頻繁な交流がみられた空間であった。また、地中海周辺にはいくつもの巨大な帝国や国家が古来、栄枯盛衰を繰り返したため、その兄弟姉妹が作りだす世界よりも多くの情報が残されている。

しかし、地中海そのものは海でしかなく、その周辺の諸々の社会を結びつけていたとはいえ、そのためにひとつの等質的な世界が出現したわけではない。諸々の社会は歴史を通して、多様であり続けた。そして、忘れてならないのは、この多様な文化伝統のなかで生活している諸々の社会の住民によって、これまでの「地中海世界」のイメージが作り出されてきた、ということである。

かくて、この多様な文化伝統を背景にして、地中海周辺の諸々の住民によって、多くの「地中海世界」のイメージが形づくられることになる。しかし、これらのイメージは地中海世界の実態の一部しか反映していない。そのため、それらは、いわばイメージする主体の幻想であることが多い¹⁰⁾。

イメージする主体は、その多くが、自分の生活と歴史に都合のよい「地中海世界」像を作りだす。そのため、極論するならば、時代ごとと地域ごと、民族など社会集団、さらには個々の思想家ごとに異なる「地中海世界」像があるということになる。しかし、幻想は時として、とりわけ政治と結びつくとき、われわれの社会生活のうえで、実態以上に影響力をもつ。

その事例は枚挙に暇がないほど多い。地中海の北のイタリアにおける近現代史において、地中海世界はローマ帝国と結びついて、国粋主義的な政治運動にインスピレーションを与えつづけてきた。また、地中海の南のエジプトにおける近現代史においも、地中海世界は、イタリアとは逆に、エジプト主義、アラブ主義、イスラム主義、アフリカ主義に対する、西欧的な「リベラリズム」の政治運動の象徴である。

現在、地中海世界は決して平和な世界であるとはいえない。そこでは、キプロス島をめぐるギリシアとトルコの対立、ユダヤ教、キリスト教、イスラムの三つの宗教にとって共通の聖地であるエルサレムとパレスチナの土地をめぐる紛争など、多くの対立抗争が生じている。しかし、それでも、フランス主導の地中海経済圏構想とか、イスラエルを巻き込んだ東地中海経済圏構想などにみられるように、地中海世界の幻想は今でも生きつづけている。

(2) 「歴史の場」としての地中海世界

これまでの「地中海世界」像のほとんどは、幻想の産物であった。しかし、だからといって、地中海を介した歴史的な交流によって培われた文化伝統さえなかった、と断じるのは明らかに行き過ぎである。確かに、地域色はみられる。しかし、地中海周辺の諸々の社会が歴史を通じて互いに影響しあい、そこにある種の文化伝統をつくりあげていったことは間違いない。

そもそも、「地中海世界」像が幻想の産物であったとしても、「地中海世界」が地中海周辺の住民によってイメージされ、われわれがそれを研究のなかで「海域」として設定しうるのも、地中海を介した交流の歴史があったからこそ、と考えるのは自然なことである。つまり、「地中海世界」には、なにがしかの歴史的な実態がともなっていた。

しかし、地中海世界がひとつのまとまりをもった歴史的統一体として存在したかとなると、話は別である。事実、われわれは通常、地中海世界というと、地中海を内海とした古代ローマ帝国と結びつけてイメージするが、この大帝国の後にも先にも、地中海全域を統治した政治権力はない。

それにもかかわらず、歴史的な交流の場としての「地中海」をキー・ワードに、「地中海世界」の永続的な統一性と独自性、つまり歴史的統一体としての「地中海世界」の存在を主張したのが、ブローデルであり、その主張を作品として結実させたのが、先に指摘した著作『フィリップ2世下の地中海と地中海世界』である。

しかし、彼の博識で華麗な文章で描かれる「地中海世界」が歴史を通じて存在

した、と信じてよいものであろうか。「地中海世界」の実態を認めるとしても、それを歴史的統一体として把握することは正しいであろうか。この誰もが抱く素朴な疑問に対して、真摯に答えようとしたのが、つい最近出版されたホーデン／パーセル『汚す海—地中海世界史についての—研究』である¹¹⁾。

この 761 ページの大部な著作の執筆目的は単純明快である。つまり、ブローデルは先の著作のなかで、主張を裏付ける証拠として挙げているのは、彼が地理的事実と考えているものと 16 世紀の文書でしかない。それゆえに、16 世紀の「地中海世界」に歴史的統一性を確認できるとしても、この世紀以外の時代にも同じことが主張できるかといえ、それは別問題である。そこで、その検証をやってみよう、というのがこの著作の執筆意図である。

その著者によれば、「地中海世界史の独自性は、比較的（交通の）容易な海を介した交流と、海岸部と島々における類例をみないほどミクロな地域に分断された地形との併存という、逆説的な環境のあり方に基づいている」。著者はこの地中海世界を構成するミクロな地域社会をマイクロ・エコロジー (microecology) という概念によって、また、このミクロな地域社会の海を介した結びつきをコネクティビティ (connectivity) という概念によって特徴づけている。

ちなみに、この著作のタイトルとなっている「汚す海」とは、この地中海のミクロな地域社会を結びつける海域的性格を文学的に表現したもので、地中海の周辺にあるすべての地域社会は、その「純粋な」性格を維持することはできず、地中海を介する他の地域社会との交流によって否応なく「汚れる」、という意味で使われている。

ところで、私の考えによれば、この著作におけるもっとも重要な貢献の一つは、これまでの「地中海世界」研究では、先に著者によって、地中海世界の独自性を作りだしたとされた二つの環境的要因、つまり比較的容易な交流を可能にした海域としての地中海と、その周辺に立地しながらも互いに分断された多くの地域社会のうち、前者の海域としての地中海の性格があまりにも強調されてきたことを指摘したことである。

言葉を変えれば、地中海世界史研究において、あまりにも地中海世界のネットワーク的性格が重視され過ぎてきた、ということである。その一つの現れが、研究の対象がネットワークの結節点となってきた都市、それも大都市に偏りすぎてきたことである。これに反して、ネットワークで結ばれる、というよりもそもそもネットワークを成立させる——というのも、差異がなければ交換自体が生じえないから——、地中海周辺地域の都市を含めたマイクロな地域社会を成り立たしめているそれぞれのエコロジカルな環境に対しては、ほとんど関心が向けられてこなかった。

このそれぞれの地域社会を成り立たしめているエコロジカルな環境とは、私の表現を使えば、生活、それも日常生活がなされている場ということになる。そこは、それぞれの基層文化が息づいている空間である。ここに、基層文化とは、ただ単に、古い文化という意味ではなく、古いものであれ新しいものであれ、人間の基本的欲求である衣食住を含む、そこでの生活と深く結びついた文化、慣習という意味である。

もし歴史的統一体としての「地中海世界」が存在するとするならば、それは基層文化を異にする多くのマイクロな地域を含み、それらが海を介して結びつき、そこに時代を越えた統一性と独自性が生み出された世界であろう。共時的にも通時的にもその他の世界と区別しうる、かかる意味での「地中海世界」は存在するのであろうか。

ホーデン／パーセルは、ブローデル・テーゼを批判的に検討しながらも、それは近代までは存在したという。反論はあろう。しかし、答えは問題ではない。ここで唯一確認すべきは、「地中海世界」を設定することによって、以上述べたような、人間社会の多様性に起因するさまざまな問いが発せられるということである。

「おわりに」にかえて 「地域」は問題関心を映す鏡

周知のように、ブローデルの著作『フィリップ2世下の地中海と地中海世界』は、時間の三層論として知られている彼の時間論に基づいて書かれた¹²⁾。三層の

時間とは、世紀単位でしか変化しない緩慢な時間の流れである「長期持続」、10年、20年、どんなに長くても50年を越えることのないサイクルで推移する「中期局面」、そして日々刻々と休むことなく生起する「出来事」である。

ブローデルによれば、「長期持続」の典型は環境と人間の心性の変化であり、「中期局面」、「出来事」をそれぞれ代表するのが、経済変動と政治情勢である。人間の歴史はこの三層の流れのなかで展開している。そして、歴史学が人間の営みの全体的把握をめざす学問である以上、それは、自然環境、人間の心性から経済・社会変動、政治情勢まで、この三層の時間の流れのなかで生起するすべての変容、変化を研究テーマにしなければならない。

どの層の時間の流れに注目するかによって、研究テーマとその分析手段はおのずと定まる。たとえば、経済史を取り上げてみるに、文明単位の経済の変遷は「長期持続」に、景気変動は「中期局面」に、政治経済事情は「出来事」に関係すると思われるが、それぞれに分析方法は異ならざるをえないであろう。

ところで、この重層的な時間の流れと歴史学におけるテーマ・分析方法との間の関係は、そのまま重層的な地域概念と地域研究におけるテーマ・分析方法との間の関係である。地域がわれわれの認識行為と深く結びつき、ある歴史状況のなかで選び取られてきた概念であること、そして、われわれの社会生活が、生活領域と帰属意識（アイデンティティ）の多元性から、可変的な複数の「地域」の重なりで営まれていることは、すでに指摘した。

つまり、研究者がどのような問題関心をもつかによって、どの「地域」を研究対象とし、どのような分析手段を選ぶべきかは、おのずと定まる。その選択肢は、「地域」概念の可変性が高い世界ほど多い。私は別の機会に、このような世界としてイスラム世界を取り上げ、イスラム地域研究の問題点を論じた¹³⁾。

本稿が対象とする地中海世界も、イスラム世界に劣らず「地域」概念の可変性が高い世界である。さらに、そこは、ヨーロッパとイスラムの二つの「文明」が対峙しているところから、イスラム世界以上に、緊張をはらんでいる。

以上を要約するならば、「地域」はひとつのキャンパスなのであり、そこにどのような絵が描かれるかは、研究者の問題関心と選択した分析手段によることに

なる。

- 1) 私が最近、興味深く読んだグローバリゼーション関係の著作は次の二つである。伊豫谷登士翁『グローバリゼーションと移民』有信堂、2001年。R. ロバートソン『グローバリゼーションー地球文化の社会理論』(阿部美哉訳) 東京大学出版会、1997年。前者は政治経済学の立場からの、後者は文化論の立場からの業績である。
- 2) 以下は、近年刊行された地域研究業績のなかで、方法論について最も包括的な考察を展開した文献である。立本成文『地域研究の問題と方法(増補改訂) 社会文化生態力学の試み』京都大学学術出版会、1999年。その第三章「時間と歴史」の冒頭において、著者は、「地域研究にとって「現代」というのは、一つの大きな基準点であり、同時代的共存というのがその課題である」(52ページ)と述べている。
- 3) ポール・ヴェーヌの著作のいくつかは日本語に翻訳されているが、そのうち、歴史学の方法論をめぐる主たる著作は、以下の二点である。ともに法政大学出版局から刊行されている。『歴史をどう書くか』(大津真作訳)(1982年)、『差異の目録 新しい歴史のために』(大津真作訳)(1983年)
- 4) プラーシュ『人文地理学原理』上、下(飯塚浩二訳) 岩波文庫、昭和15年
- 5) 注(2)で挙げた文献、ならびに加藤博「シンポジウム「地域研究の現状とイスラーム研究の位置」」『アジア経済』Vol. 42, No. 3, アジア経済研究所、2000年を参照のこと。そこでは、イスラーム地域研究を題材に、さまざまな地域概念が整理されている。
- 6) 私は、以下の文献のなかで、これまでいくつかの異なった問題関心や視角から論じられてきた地中海世界を、(1)幻想としての地中海世界、(2)問題設定としての地中海世界、(3)歴史のなかの地中海世界、の三つに整理して論じた。加藤博「序」『地中海世界史3 ネットワークのなかの地中海』歴史学研究会編、青木書店、1999年。後に紹介するバーデン／パーセルの業績を参考にして、(4)「生活の場」としての地中海世界を、この三つに加えて、地中海世界を理解するためのもう一つの視角として指摘できると思われる。
- 7) Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Armand Colin, Deuxième édition, 1966 (邦語訳『地中海』〔浜名優美訳〕5巻、藤原書店、1991-95年)。
- 8) 東南アジアの海については、アンソニー・リードによる次の文献がある。

Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680 Volume One : The Lands below the Winds*, Yale University Press, 1988. (邦語訳『大航海時代の東南アジア I 貿易風の下で』(平野秀秋/田中優子訳) 法政大学出版局, 1997年). また, わが国における「海のアジア」論に関する文献は多いが, 次の文献が最もポレミックな議論を展開している. 川勝平太『文明の海洋史観』中央公論社, 1997年.

ところで, ブローデルの「地中海世界」がひとつのアナロジーとして利用されることに, 私自身, 何の反対もないが, 東南アジアの海についてはともかく, 東アジアの海について, 「海のアジア」論者が, 自説を裏付けるために, ブローデルの地中海論を持ち出すことには, ある種の違和感をもつ. というのも, パーデン/パーセルが強調するように, 地中海が歴史上, 海域として大きな役割を果たしたしたのは, この海が, 島や陸地の標識を確認しつつ安全に航海できるほどの, 小さくもなく大きくもない規模をもっていたことによるが, 東アジアの海でかかる安全な航海ができたとは考えられないからである.

- 9) Fernand Braudel, *Grammaire des civilisation*, Les Editions Arthaud, Paris, 1987 (邦語訳『文明の文法 世界史講義』(松本雅弘訳) 2 巻, みすず書房, 1995年).
- 10) 次の文献の五章「アレクサンドリアの憂愁」, 六章「「世界の母」カイロ」には, 地中海世界のうち, 東地中海世界に関して作りだされた多くのイメージについての詳しい分析がみられる. 加藤博『イスラム世界論 トリックスターとしての神』東京大学出版会, 2002年.
- 11) P. Horden/N. Purcell, *The Corrupting Sea - A Study of Mediterranean History*, Blackwell Publishers Inc., 2000. なお, 現在, 一橋大学地中海研究会によってこの著作の翻訳が進められ, 近い将来, 法政大学出版局から刊行される予定である.
- 12) 時間論を始めとしたブローデルの歴史研究における方法論については, 次の文献を参照のこと. 井上幸治編監訳『フェルナン・ブローデル [1902-1985]』新評論, 1989年.
- 13) 注(5)で挙げた文献, ならびに注(10)で挙げた文献の「結 イスラム世界論の功罪」を参照のこと.

(一橋大学大学院経済学研究科教授)